

検査結果の名前	検査項目について
BMI	BMIはボディ・マス・インデックスの略で、肥満の程度を示す体格指数として用いられます。
腹囲	内臓周りに蓄積された脂肪の程度を調べます。おへその周りで測定します。
血圧	心臓が収縮するときと拡張するときの血圧を調べます。血圧が高いと動脈硬化や脳血管障害を引き起こす原因となります。
総コレステロール	HDLコレステロール(いわゆる善玉コレステロール)、LDLコレステロール(いわゆる悪玉コレステロール)、その他のリポたんぱくに含まれるコレステロールの総計です。血液中でこの値が高くなれば、動脈硬化の危険度が増大します。
HDLコレステロール	血液中の余分なコレステロールを肝臓に戻す働きをしており、善玉コレステロールとも呼ばれます。
LDLコレステロール	肝臓から体中にコレステロールを運ぶ働きをしています。増えすぎると動脈硬化などを促進します。悪玉コレステロールとも呼ばれています。
中性脂肪	血液中の中性脂肪値を測定します。主に炭水化物の取りすぎや、アルコールの飲みすぎで高くなります。
空腹時血糖	血液中のブドウ糖のことで、インスリンなどによって一定量に保たれています。インスリンの分泌量が少ない、働きが悪いと空腹時でも血糖値が高い状態が続き、糖尿病が疑われます。
HbA1c	血糖と結合したヘモグロビンをHbA1cといいます。血糖値は食事や運動で変化しますが、HbA1cは変動が小さく、過去1~2ヶ月の血糖の平均値に相当します。
心電図	心電図は血液を全身に送る心筋の動きを記録したもので、心筋梗塞、狭心症や不整脈など心臓の異常を検査します。
眼底検査	眼球の網膜の状態を検査します。網膜には細かい血管が走っていて、網膜を観察すると全身の血管の状態が確認できるので、目の病気だけではなく動脈硬化なども判定できます。
AST(GOT)、ALT(GPT)	ASTとALTは酵素の一つで、肝細胞など多く含まれています。肝細胞が破壊されると、血液中に流れだして数値が高くなります。
γ-GTP	アルコールなどで肝臓に障害が起こると血液中に流れ出し、数値が上がります。
HBs抗原、HCV抗体	B型とC型の肝炎に感染しているかどうか検査します。
尿たんぱく	通常、尿の中にたんぱく質は含まれませんが、なんらかの原因で尿にたんぱく質が出ると陽性になります。
尿潜血	尿に血液が混じっているかどうかを調べる検査です。腎臓や尿路などに炎症や出血などの異常があると赤血球が尿にあふれ出します。
クレアチニン	腎機能を示す物質で、腎臓でろ過され、尿中に排泄されますが、腎機能が低下していると排出量が減少し、血液中に増えます。
eGFR	腎臓で時間あたりどれくらい血液をろ過しているかを調べます。
尿酸	尿酸はプリン体が分解されてできる老廃物で、痛風の原因になります。肥満であったり、プリン体を過剰摂取した場合や腎機能が低下すると、血中濃度が高くなります。
視力	ものがはっきり見えるかどうかを調べます。
聴力	音の大きさ、高・低音範囲などが聞こえるか検査します。
便潜血反応	大便を採取して、血が混じっているかを検査します。消化器のがんや潰瘍の有無を調べます。
赤血球	赤血球は酸素を全身に運び出しています。赤血球が少ないと起こるのが貧血です。
血色素量	赤血球に含まれるヘモグロビンの量を表しています。ヘモグロビンには酸素を運ぶ働きがあります。少なくなると、息切れなどを起こす可能性があります。
ヘマトクリット	赤血球の容積が血液中に占める割合を表したものです。貧血の有無などを調べるのに用いる項目です。
血小板	血液にあって、血管が傷ついた時凝固して出血を止める役割をします。
白血球	細菌感染を起こすと、殺菌するために白血球が増加するので、炎症などをみる目安になります。
CRP	体内で炎症がおこるとCRPというたんぱく質が血液中に増加します。
胸部レントゲン	X線で胸部を撮影して、肺や心臓に異常がないかどうかを診断します。
肺活量	呼吸機能検査で、年齢や性別で決まる標準的な肺活量やはじめの1秒間に吐き出せる呼気量(1秒率)の値に対する実測値の比率を示します。
喀痰細胞診	喀痰とは肺などの分泌物が集まったもので、肺や気管に病気があると痰の量が増加したり、血が混じったりします。顕微鏡で痰に混じった細胞を観察して、がん細胞の有無を調べます。